

柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器とその評価

－国府系ナイフ形石器・上ゲ屋型彫刻刀形石器・本ノ木型尖頭器・出現期石鏃の紹介と関連資料の検討－

橋本勝雄

はじめに

柏市小山台遺跡は柏北部東地区遺跡群の一角をなし、公益財団法人千葉県教育振興財団（旧・財団法人千葉県文化財センター）によって、発掘調査が平成10年度～平成28年度に実施された。

筆者は、これまで整理作業と並行して、特に重要な資料を、逐次紹介し検討してきた（橋本2016c・2017a）。

今回もその一環であり、報告書の刊行に先行して、以下の石器を資料化するとともに、関連資料の検討により、その歴史的位置づけを明らかにするものである。

- 資料1 小山台遺跡(36) 国府系ナイフ形石器
- 資料2 小山台遺跡(78) 上ゲ屋型彫刻刀形石器
- 資料3 小山台遺跡(48) 本ノ木型尖頭器①
- 資料4 小山台遺跡(61) 本ノ木型尖頭器②
- 資料5 小山台遺跡(4B) 本ノ木型尖頭器③
- 資料6 小山台遺跡(50) 本ノ木型尖頭器④

- 資料7 小山台遺跡(9) 石鏃（縄文草創期後半）
- 資料8 小山台遺跡(15) 局部磨製石鏃（早期前半）①
- 資料9 小山台遺跡(31) 局部磨製石鏃（早期前半）②
- 資料10 小山台遺跡(59) 局部磨製石鏃（早期前半）③

1 資料の紹介（第2図）

いずれも遺構外から散発的に出土しており、原位置をとどめていない。そのため資料の位置づけについては、型式学的な見地から判断せざるを得なかった。

第2図1～6は後期旧石器時代後半に属する資料群である。

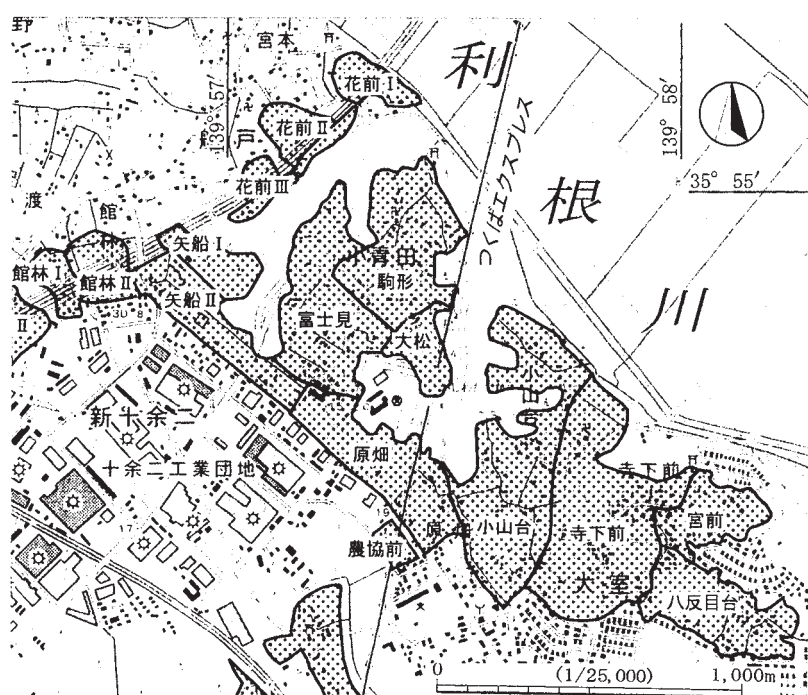
1は東北頁岩製の国府系ナイフ形石器である。上下両端に発掘調査時に生じた損傷（ガジリ）が部分的にみられる。大きさは長さ6.0cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm、重さ9.81g、刃角は約55度を測る。底面（石核の主要剥離面の一部）を有する横長剥片を素材としており、底面と主要剥離面の剥離方向はほぼ同一である。打面は平坦で刃部はヒンジフラクチュアを呈している。正



柏北部東地区遺跡群

1	花前Ⅰ※	7	原畑
2	花前Ⅱ※	8	駒形
3	花前Ⅲ※	9	富士見
4	館林Ⅱ※	10	大松
5	矢船Ⅰ※	11	小山台
6	矢船Ⅱ		

※常磐自動車道建設に伴い一部調査済



第1図 柏北部東地区遺跡群関連遺跡分布図（新田2015を一部改変）

面の右側縁の下半部に平坦剥離、左側縁の上部に細かな加工が連続的に施されている。後者の加工からはヒンジフラクチュアによる丸味を除去し、尖頭部を作出する意図が感じられる。

2は上ゲ屋型彫刻刀形石器の母型である。横長剥片を素材として、二次加工が表面の二側縁上部、裏面の下部に施されている。表面の二次加工は急角度であり、あたかもナイフ形石器の刃潰し加工のようである。先端部には第一次剥離面が残されており、未加工の状態となっている。大きさは長さ2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、重さ1.44gを測る。石材は良質半透明な信州系黒曜石である。これまで信州系黒曜石の使用は武蔵野台地以西で散見されていたが、千葉県では初出である。

3～6は、旧石器時代終末期の本ノ木型尖頭器と考えられる。3は先端部の破片(大きさ:長さ1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、重さ2.31g)である。左側縁には衝撃剥離(彫器状剥離)がみられ、先端部は折損している。石材は黒色頁岩である。4(大きさ:長さ6.8cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm、重さ15.72g)は先端部が欠損している。石材は黒色のチャートである。左右対称で、精緻な加工がほどこされており、小なりといえども優品の部類に属する。5(大きさ:長さ4.3cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm、重さ6.74g)は、折損面(右側縁下部)に二次加工を施された、いわば再生品である。下端部に部分的にガジリがみられる。石材は風化面が黄白色を呈するホルンフェルスである。6(大きさ:長さ3.2cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ6.22g)は先端部破片である。表面左側・上下両端に新たな剥離面(黒)がみられる。おそらく、縄文人(中期)によって、石鏃への転用が図られたのであろう。

7～10は、縄文時代草創期後半及び早期前半(撚糸文期)の石鏃である。7(大きさ:長さ2.1cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.4g)は草創期後半に属する。形態は先端付近が外方に突出し、五角形鏃と三角形鏃の折衷形態を呈する。石材はチャートである。8・9は早期前半の局部磨製石鏃であり、石材はいずれもチャートである。8(大きさ:長さ2.5cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ1.03g)の形態は正三角形に近い二等辺三角形を呈し、扁平・薄手である。表裏の中央に研磨痕が観察される。9(大きさ:長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.74g)は先端と片脚が欠損しており、全体の形状は定かではない。8と異なり、研磨は片面中央に偏る。8・9の研磨面を観察すると、線状痕が見られず、器面の凹凸を問わず研磨されている。このこと

から、研磨具については、砥石ではなく、器面に密着する木材や毛皮等の軟質なものが想定される。10(大きさ:長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ0.51g)は粘板岩を石材とした特異な資料である。先端部破片と推定され、端部には衝撃剥離(縦溝状剥離)が看取される。周辺加工ののち表裏とも器面が研磨されている。研磨面が平滑であり、顕著な線状痕がみられることから、砥石による研磨であることは明白である。この点については、8・9とは好対照である。

2 関連資料の検討(第3～第11図)

次に、先に紹介した後期旧石器時代の国府系ナイフ形石器、上ゲ屋型彫刻刀形石器、本ノ木型尖頭器、及び縄文早期前半の局部磨製石鏃について、順次、関連資料との比較検討を行なう。

(1) 国府系ナイフ形石器(第3・第4図)

南関東では、数ある国府系ナイフ形石器の中で外来的な性格を帯びたものとして東北頁岩製と乳白色の玉髓製の二種がある(橋本2017b)。

前者については茨城県土浦市北西原遺跡、千葉県柏市大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡、我孫子市鹿島前遺跡、印西市油作第2遺跡、及び千葉市椎名崎古墳群B支群が挙げられる(第4図)。今回の小山台例は、この関連資料ということになる。

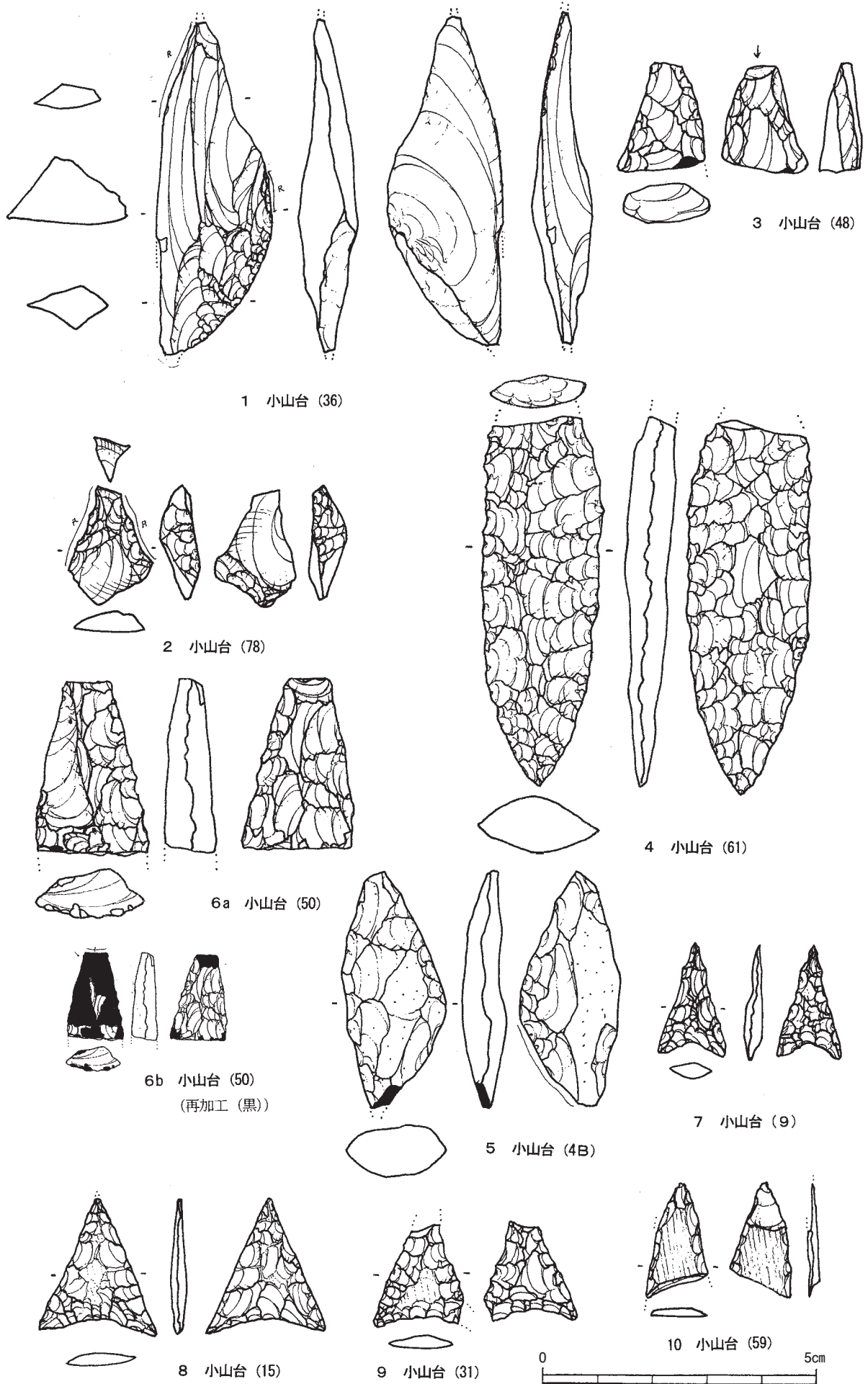
一方、後者については埼玉県上尾市殿山遺跡がある。この石材(「半透明の頁岩」)の産地については、阿部朝衛(阿部1996・1997・2013)、中村由克(中村2004・2008b)及び柴田徹(柴田2004)による野外調査の結果や考古遺物の多寡から新潟県北部方面が想定される。また、この付近では東北頁岩とのセット関係が現象化しており、先の資料の石材構成との相関性がみられる。

以上の新潟県北部の状況、群馬方面との断絶、及び東関東に偏る遺跡分布の在り方を考慮すると、小山台例については、新潟県北部から会津方面を經由して関東に製品としてもたらされた(図中矢印)可能性が高い。

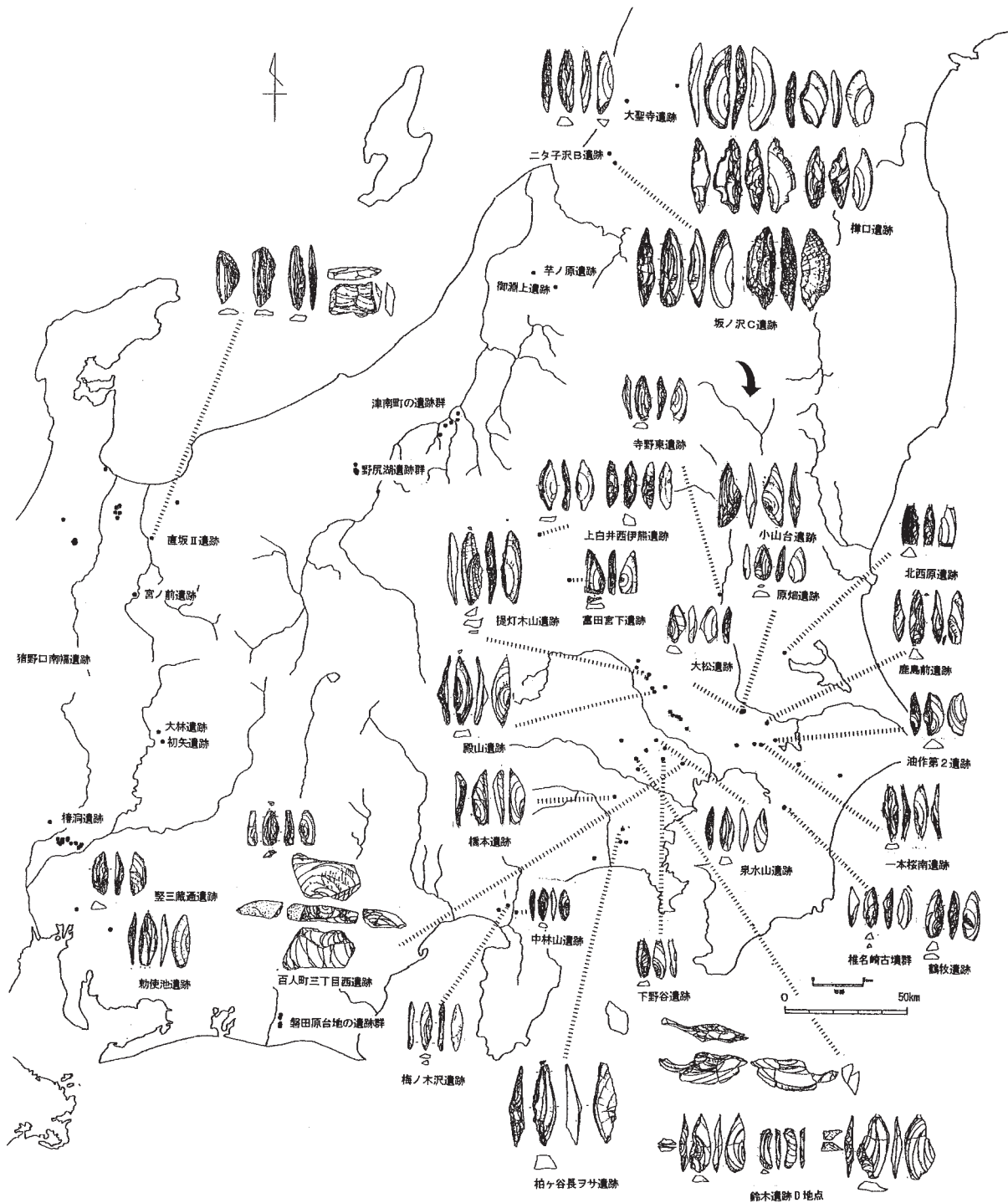
(2) 上ゲ屋型彫刻刀形石器(第5・第6図)

上ゲ屋型彫刻刀形石器(以下「上ゲ屋型」という)の分布域は、南関東(下総・武蔵野・相模野)と愛鷹・箱根山麓を核地域として、茨城・福島、長野方面に波及している。後期旧石器時代後半の砂川期を特徴づける石器型式の一つである。

先に筆者は、この上ゲ屋型を集成し、その特質と歴史的意義を論じが(橋本2010、2016d)、その後、追



第2图 柏北部東地区小山台遺跡出土石器



第3図 東日本における国府系石器群関連遺跡分布図 (橋本2017bを一部改変)

加資料が登場したので、再度紹介しておく (第6図)。

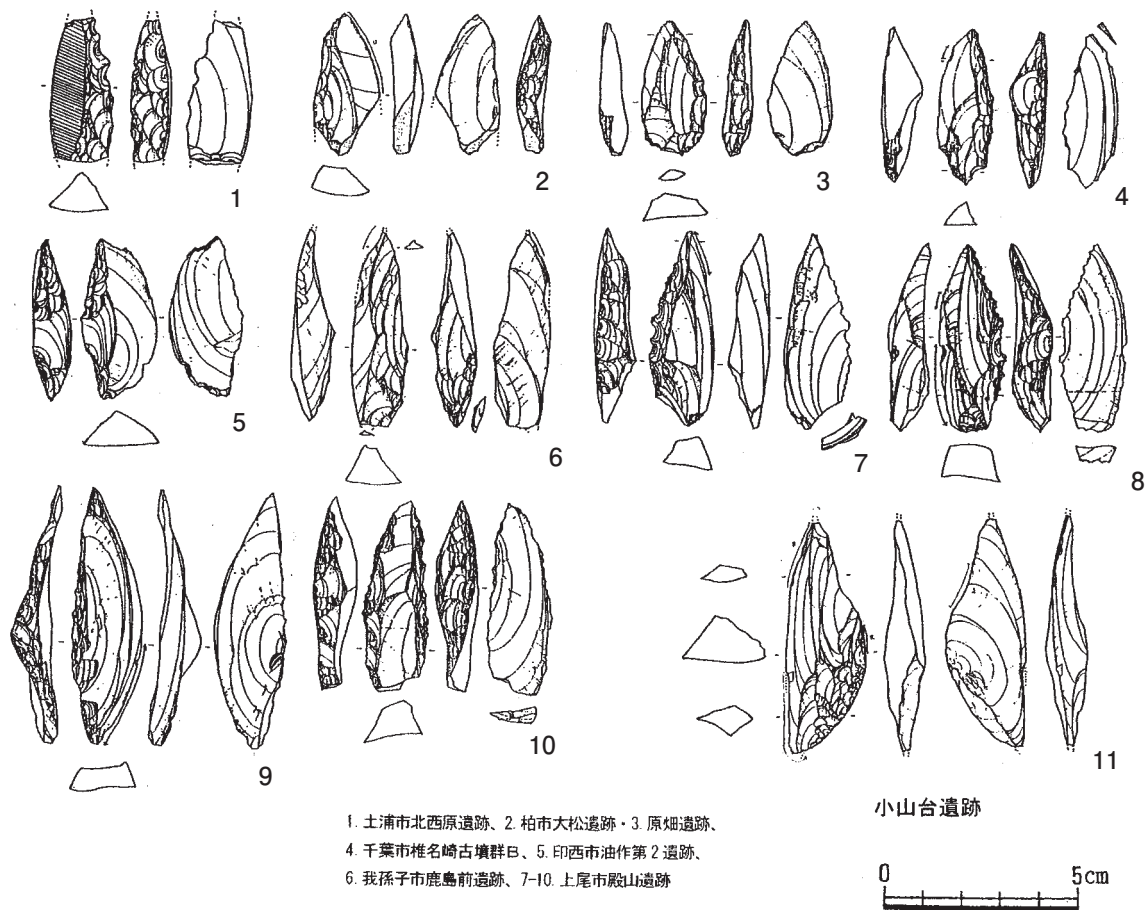
 厨台No11・12遺跡 (橋本1989)、小山台遺跡、聖人塚遺跡 (田村ほか1986)、森古墳群 (吉田章一郎ほか1983)、東浪見遍照寺裏遺跡、粟島台遺跡、多摩ニュータウンNo125 (追加資料) (新井ほか1982・竹尾ほか1999)、日性寺B遺跡 (ウィルソンほか1997)、鷲ヶ峰遺跡 (服部2000) 山中城E遺跡 (辻ほか2017)、上ノ原遺跡 (第2次) (中村ほか2008a)

 直近の集成では、全国で遺跡数が46遺跡、資料数は164点であったが、今回、これに9遺跡20点加わる

こととなった¹⁾。

この中で、東浪見遍照寺裏遺跡と粟島台遺跡については未報告の採集資料であるため、若干の解説を要する²⁾。

遍照寺裏遺跡の上ゲ屋型は採集品ではあるが、採集者の小高春雄氏の言によれば、現地ではひとつの遺物集中地点を形成されていたものと推定される。ただし、この点については、現地はすでに破壊され、旧状をとどめていないので定かではない。遺物は現在3点保管されている。内訳は上ゲ屋型彫刻刀形石器 (第6図、二次加工ある剥片 (第6図11)、及び横長剥片となっ



1. 土浦市北西原遺跡、2. 柏市大松遺跡・3. 原畑遺跡、
 4. 千葉市椎名崎古墳群B、5. 印西市油作第2遺跡、
 6. 我孫子市鹿島前遺跡、7-10. 上尾市殿山遺跡

第4図 遠隔地石材の国府系石器群 (橋本2017bを一部改変)

ている。上ゲ屋型(長さ2.8cm、幅2.7cm、厚さ0.9cm、重さ6.04g)は黄玉石製で横長剥片を素材として、ほぼ全周に急角度な二次加工が施されている。上端の機能部は欠損している。共伴した二次加工ある剥片(長さ3.9cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、重さ6.02g)は両設打面の石核から生産された石刃を素材としており、左側面上部に部分的な二次加工をとどめる。石材はメノウである。このほかに図示しなかったがメノウ製剥片の被熱資料(長さ3.1cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、重さ7.01g)がある。

粟島台遺跡の採集資料(長さ4.3cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm、重さ3.34g)は石刃素材であり、石材は「白滝頁岩」である。このほかにも、近傍から石刃が1点採集されている。このような採集状況から、ひとつの遺物集中地点が形成されているものと推定されるが、残念ながら、今のところ少量であり十分な評価に堪えない。詳細な検討は、今後の発見をまって実施したい。

さて、上ゲ屋型には技術と石材に大きな特徴がある。上ゲ屋型の製作技術を端的に言えば、効率的の一語に尽きる。再加工が頻繁であり、徹底的に使い尽くすための工夫として、「彫刻刀面調整」、「打面調整」及び

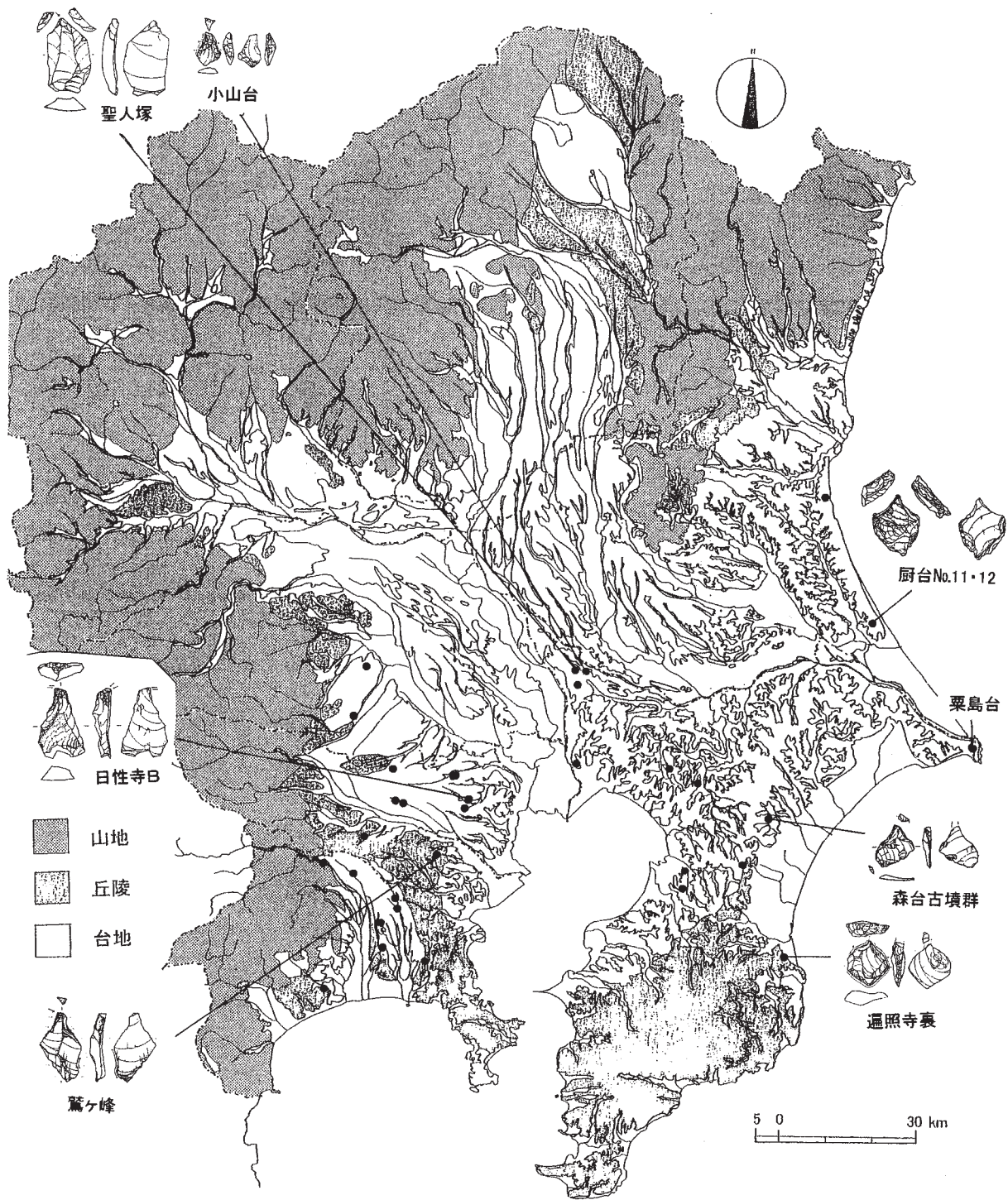
「挟入状剥離」により彫刻刀面の更新を行っている。

また、上ゲ屋型は石刃素材が基本であるが、今回の追加資料も、非石刃と推定される資料は21点中5点(第6図1、2c、4a、5、6a)、に過ぎず、この点を補強している。

上ゲ屋型の石器石材は、総じて、スクレーパー類と同種のメノウ質の岩石が多く、珪化度が高く硬質で再生に向く石材といえるが、一方で赤・黒・黄(茶)・白・青などの色彩に対する強いこだわりも垣間見られる。

先の論考では、石材組成は、赤玉石4点、黄玉石26点、黒玉石7点、(信州系)黒曜石20点、チャート59点、メノウ12点、硬質細粒凝灰岩3点、珪質頁岩5点、灰白色凝灰質頁岩7点、いわゆる「白滝頁岩」17点、岩種不明4点となっている(橋本2016d)。

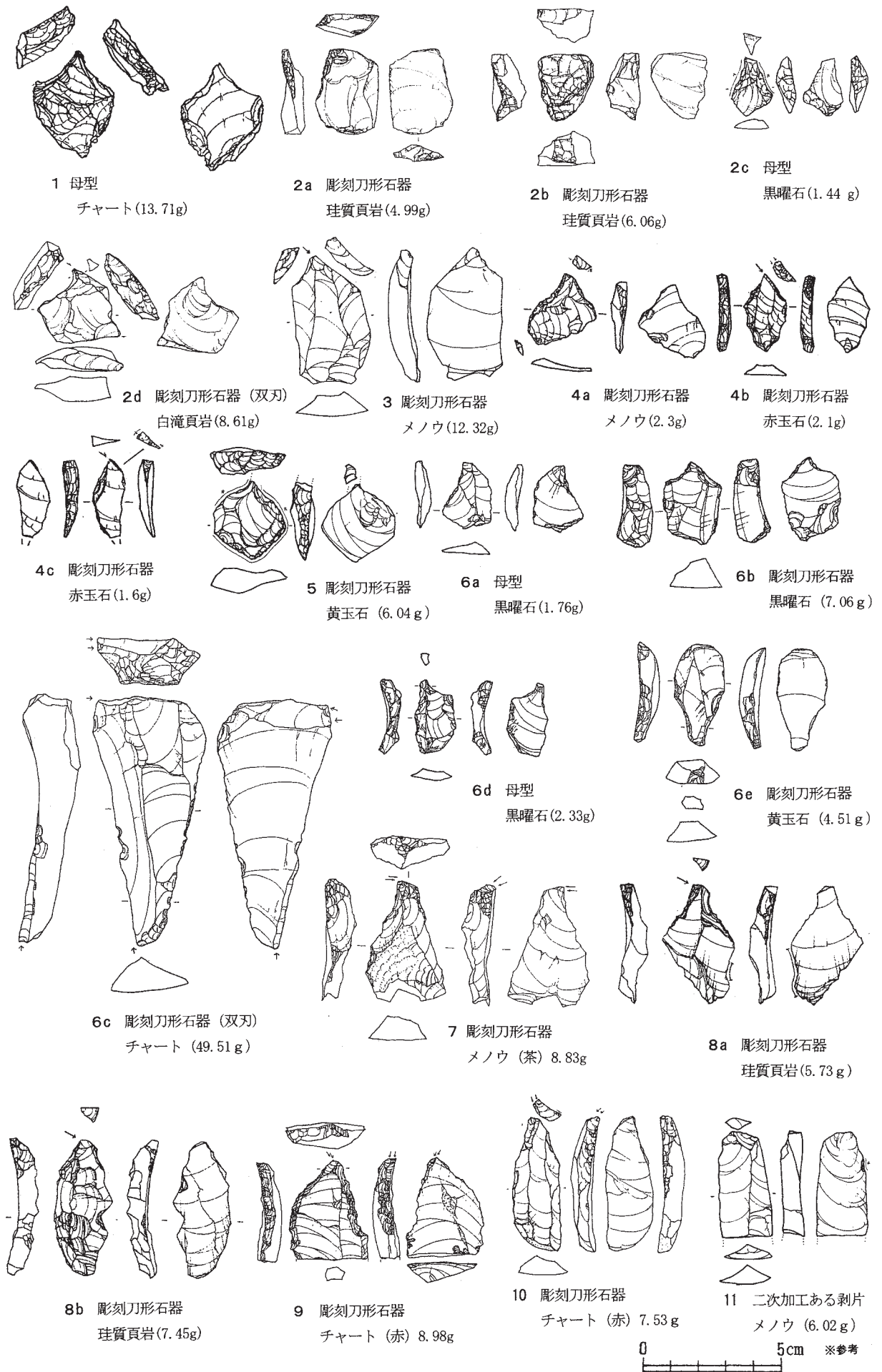
これに対して、追加資料の石材構成は、チャート・珪質頁岩・黒曜石各4点、メノウ3点、黄玉石・赤玉石各2点、及びチャート・「白滝頁岩」各1点となっている。これまで赤玉石は、静岡県向田A遺跡と同矢川上C遺跡の出土資料例に留まっていたが、今回、これに森台古墳群の2例が加わるようになった。希少例として、ここに明記しておく。



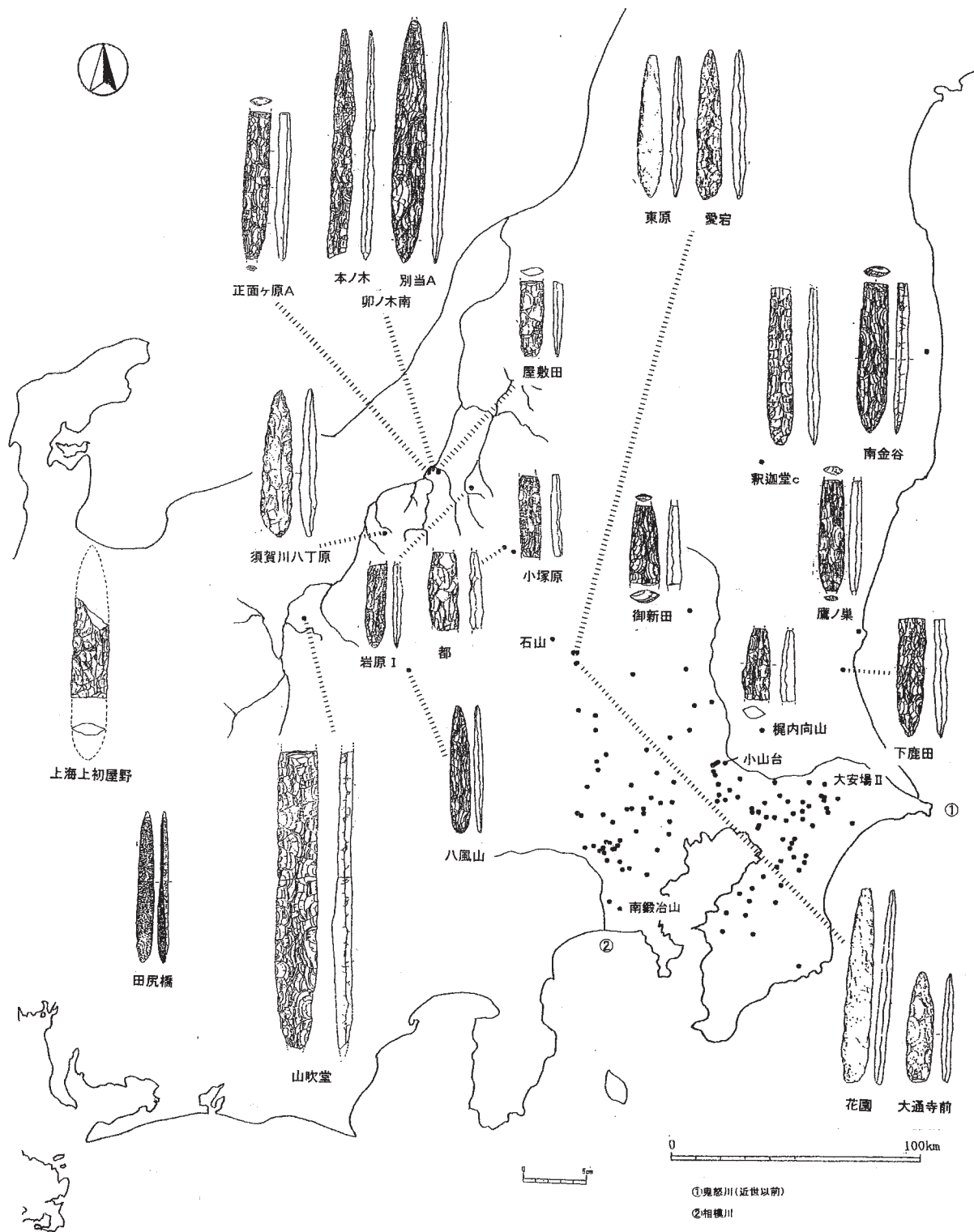
第5図 上ゲ屋型彫刻刀形石器関連遺跡分布図・追加資料 (橋本2016dを一部改変)

第6図の掲載資料と遺跡

挿図番号	遺跡名	所在地	発掘採集	挿図番号	遺跡名	所在地	発掘採集
1	厨台No.11・12	茨城県鹿嶋市	発掘	6	多摩ニュータウンNo.125	東京都八王子市	発掘
2	小山台	千葉県柏市	発掘	7	日性寺B	東京都杉並区	発掘
3	聖人塚	千葉県柏市	発掘	8	鷺ヶ峰	神奈川県川崎市	発掘
4	森台古墳群	千葉県山武市	発掘	9	山中城E	静岡県三島市	発掘
5・11	遍照寺裏	千葉県夷隅郡一宮町	採集	10	上ノ原 (第2次)	長野県上水内郡信濃町	発掘



第6図 上げ屋型彫刻刀形石器の追加資料



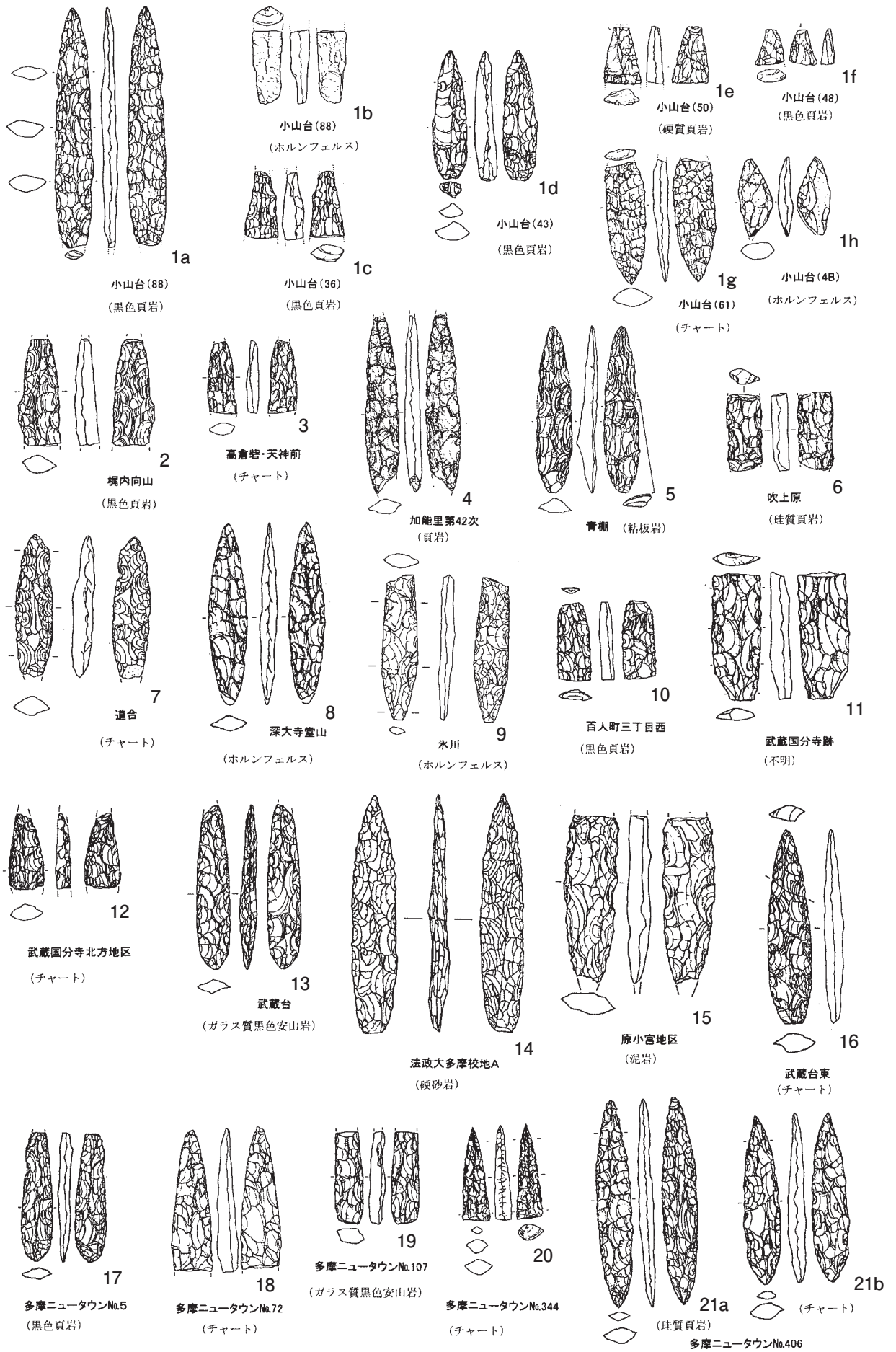
第7図 本ノ木型尖頭器関連遺跡分布図 (橋本2017aを一部改変)

(3) 本ノ木型尖頭器 (第7～第9図)

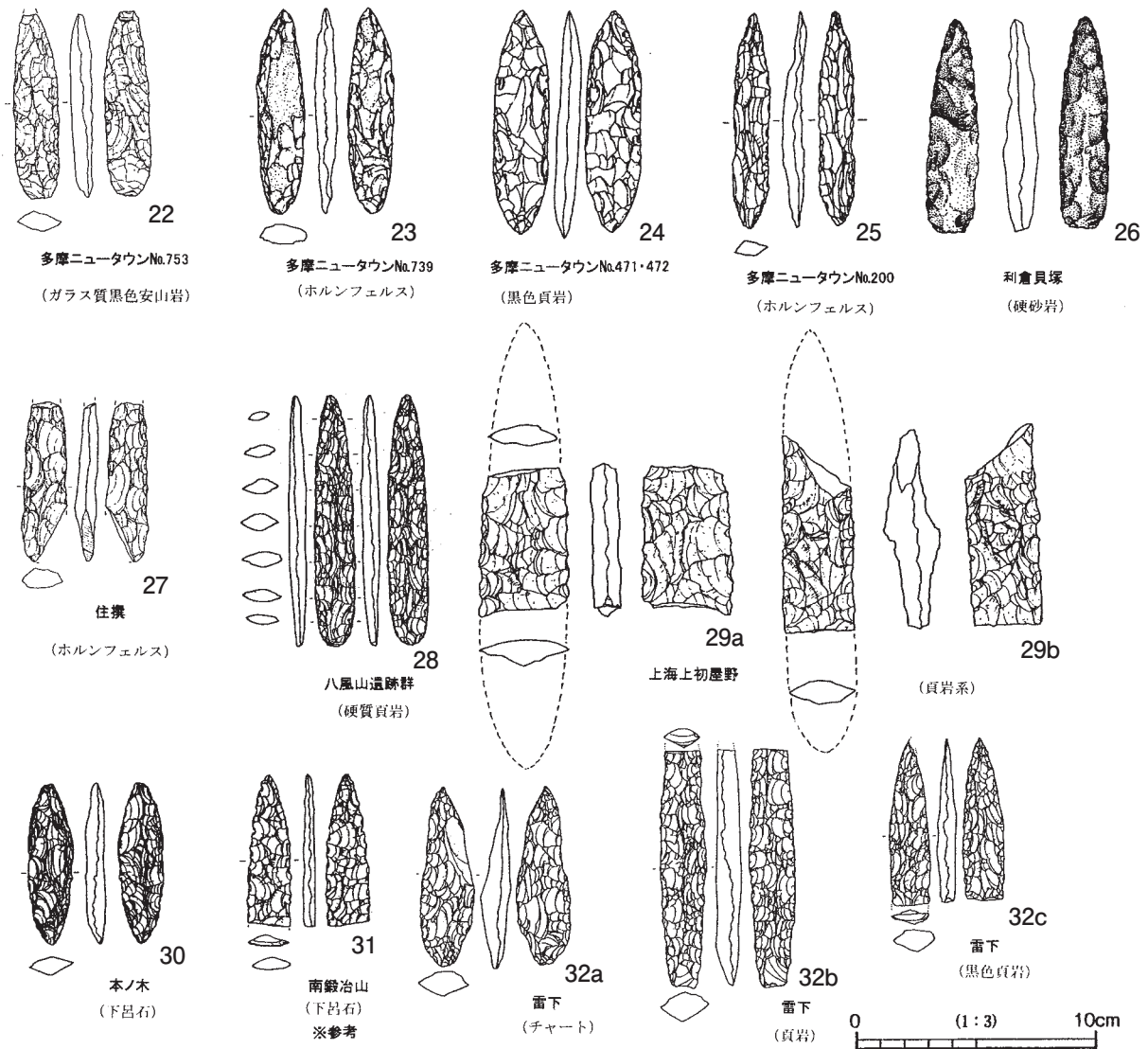
今回の追加資料により、本ノ木型尖頭器の関連資料の数量は、都合152か所・3,842点超(福島1、新潟6、長野3、岐阜2、茨城6、栃木3、群馬11、千葉68、埼玉13、東京31、神奈川8)に達した。

千葉県：柏市小山台遺跡(橋本2016c・2017a)、成田市大安場Ⅱ

遺跡(蜂屋2017)、市川市雷下遺跡。茨城県：つくば市梶内向山(川村・島田2003)。埼玉県：鶴ヶ島市高倉砦・天神前遺跡(斉藤・早川1996)、飯能市加能里遺跡第42次(宮内ほか2016)、鶴ヶ島市青棚遺跡(西井1995)、和光市吹上原遺跡(鈴木ほか2015)。東京都：北区道合遺跡(鶴間ほか2015)、調布市深大寺山遺跡(中津1977)、目黒区氷川遺跡(伊藤・竹花2015)、新宿区百人町三丁目西遺跡(園村ほか2006)、府中市武蔵国分寺跡(坂



第8図 本ノ木型尖頭器の追加資料①



第9図 本ノ木型尖頭器の追加資料②

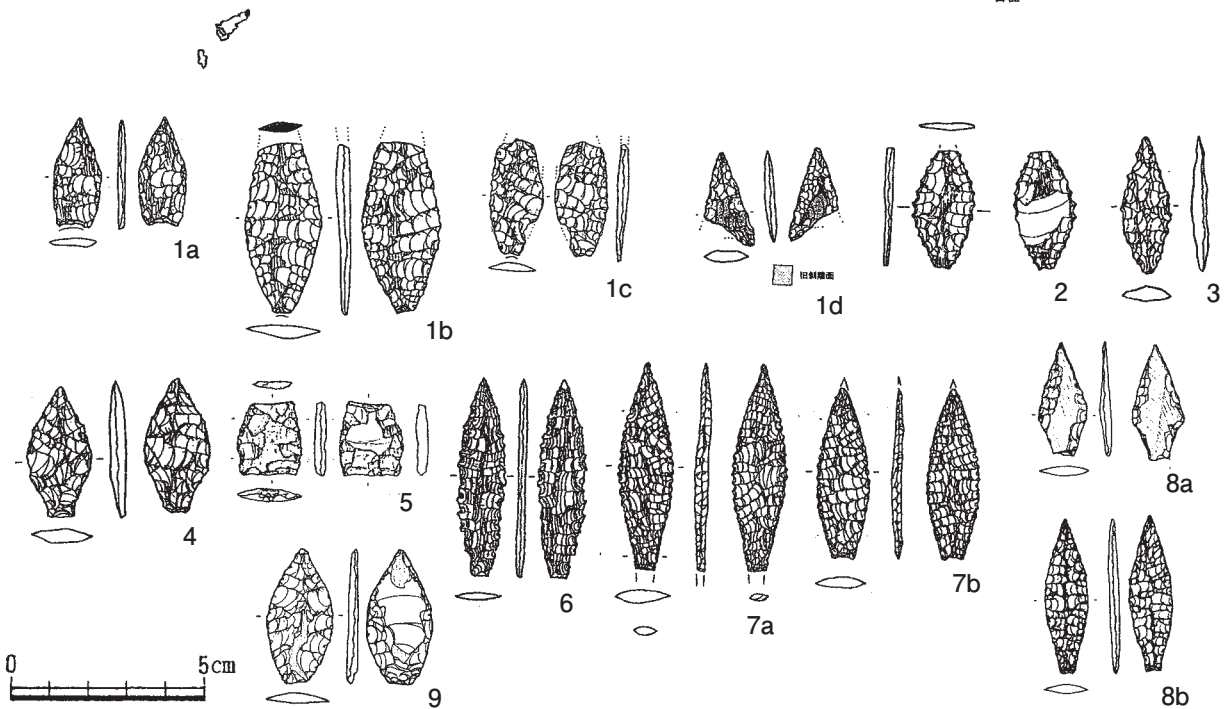
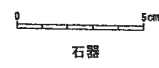
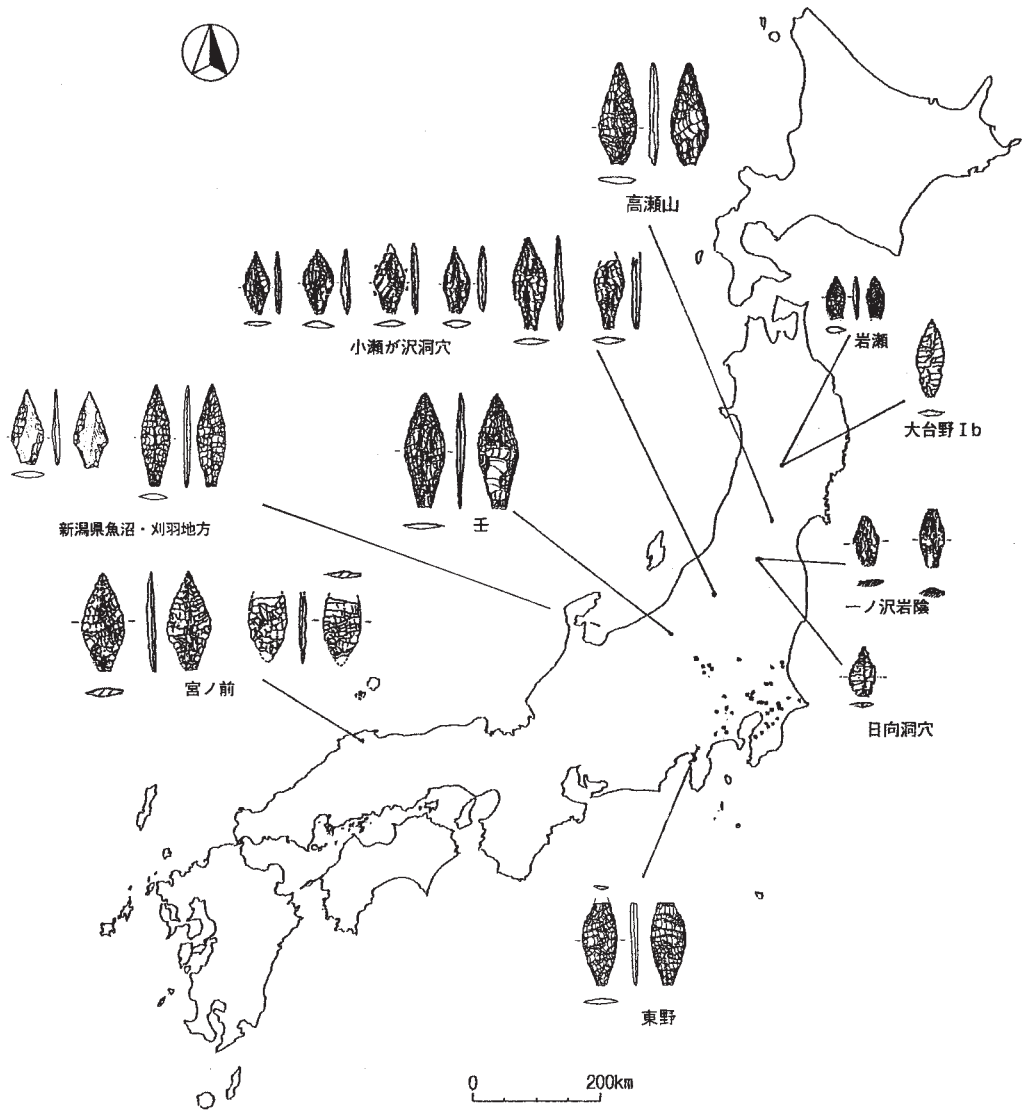
詰ほか2000)、国分寺市武蔵国分寺跡遺跡北方地区(福島ほか2003)、武蔵台遺跡(伊藤ほか2010)、法政大学多摩校地遺跡群A地区(伊藤ほか1986)、あきる野市原小宮地区遺跡群(橋口ほか2008)、府中市武蔵台東遺跡(坂東ほか1999)、稲城市多摩ニュータウン遺跡No.5(原川ほか1987)・八王子市多摩ニュータウンNo.72(岩橋1996)・八王子市多摩ニュータウンNo.107(佐藤・山口1999)・町田市多摩ニュータウンNo.344(小坂井ほか1998)・八王子市多摩ニュータウンNo.406(栗城ほか1984)・No.753(栗城ほか1999)・町田市多摩ニュータウンNo.739(栗城ほか1989)・稲城市多摩ニュータウンNo.471・472(鶴間ほか1990)・町田市多摩ニュータウンNo.200(田中ほか1996)。神奈川県:横浜市利倉貝塚(北川1990)、横浜市住撰遺跡(伊丹ほか1996)。長野県:佐久市八風山遺跡群(須藤1999)。岐阜県:高山市上海上初屋野遺跡(旧石器部会2017)。

追加資料を第8・9図に掲げたが、従前と同様に、関東、中部、北陸に局限される。特に関東では、かつ

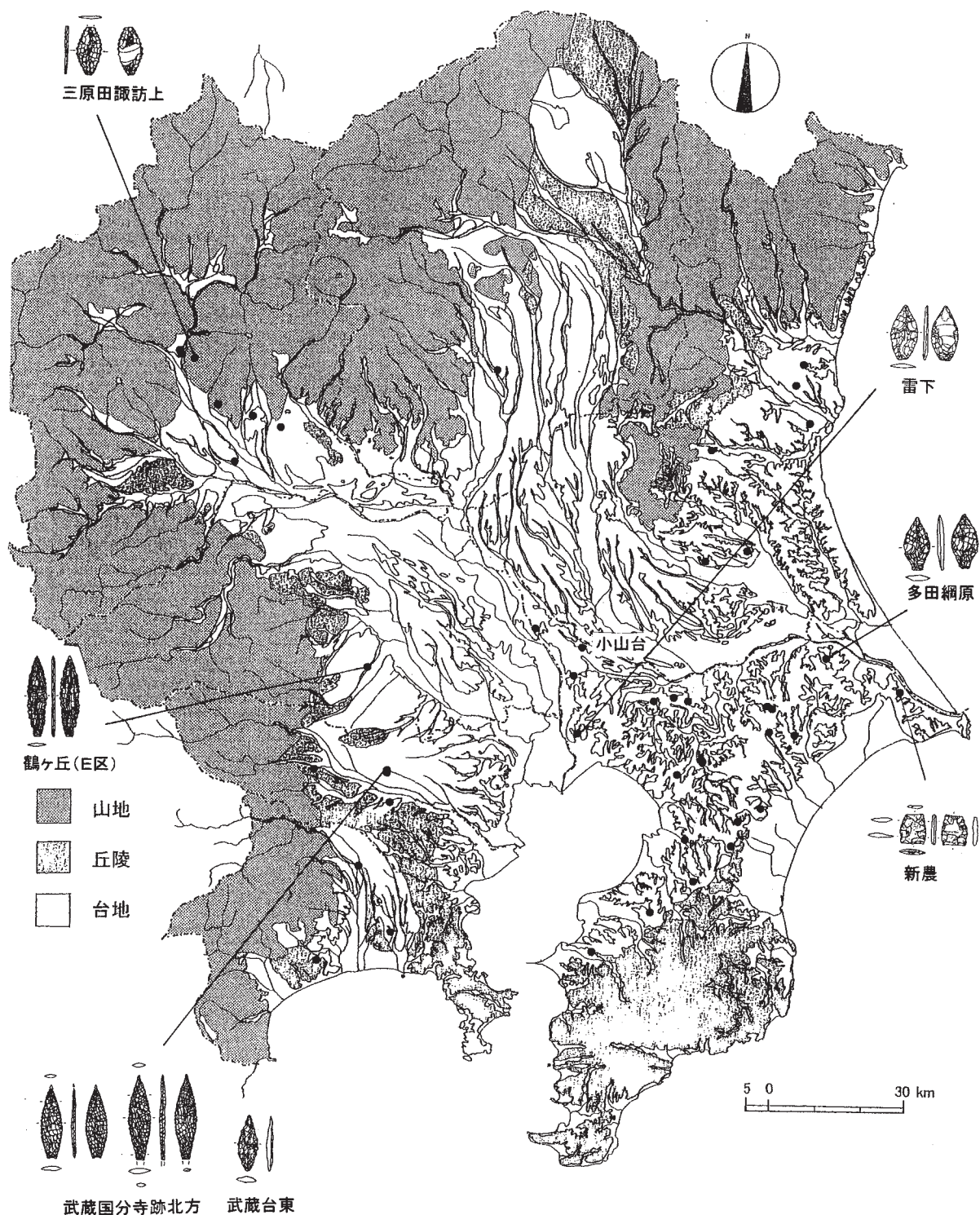
ての鬼怒川(近世初頭以前)と相模川にはさまれた区域に遺跡が集中しており、一種の核地帯を形成している(橋本2017a)。

中には、本ノ木遺跡や前田耕地遺跡など尖頭器類の出土量が1,000点を超える大規模な製作遺跡もあるが、単独出土が大半であり、総量が10点を超えるような、まとまった資料は、これまで8例(新潟県本ノ木遺跡、東京都前田耕地遺跡、千葉県南大溜袋遺跡・元割遺跡・弥三郎第2遺跡・宮野木第1遺跡・木戸先遺跡、神奈川県吉岡遺跡群C区)を数えるに過ぎなかった。その意味では今回追加された成田市大安場Ⅱ遺跡の調査成果は重要である。未報告のため詳細は不明であるが、遺物集中地点から計15点の尖頭器のほか削器等が出土したとのことである(蜂屋2017)。

本ノ木型の石器組成についてはこれまで尖頭器、ノッチ、石斧、搔器、削器、有溝砥石、石錐、楔形石器、石鏃(本ノ木遺跡、吉岡遺跡群C区、なすな原遺跡、



第10図 木葉形薄型尖頭器関連遺跡の全国分布 (橋本2017aを一部改変)・追加資料



第11図 関東における木葉形薄型尖頭器関連遺跡の分布 (橋本2017aを一部改変)・追加資料

南大溜袋遺跡) 等が報じられているが、遺物の多寡にかかわらず尖頭器とシャフトの製作に関わるノッチが基本形となっている。さしずめ狩場の装備といえよう。

前田耕地遺跡を除けば、基本的に初期の製作工程(素材生産の段階)が欠落しており、豊富な遺物で知られる本ノ木遺跡にしても、原石や自然面を有する資料がみられず同様の状況にある。すなわち大半の遺跡は、折損後の再加工(先端部・基部)の段階にあるといえ

よう。再加工は、基部を残し長さが減じる図式が一般的であり、特に石材消費地の千葉県では顕著である。

いずれの地域も在り石材偏重で黒色頁岩の多用という傾向は普遍的であり、地域を超えて石材の共通性が現象化している。

特筆すべき新事実として、本ノ木遺跡(小林ほか2016)における下呂石の存在が指摘される。報文の第56図57(008f)の遺物がこれに該当する。仮にこれ

が事実であるならば岐阜方面との交流が想定され、高山市上海上初屋野遺跡が関連づけられる(旧石器部会2017)。

このほか、下呂石製尖頭器の参考資料として、新たに南鍛冶山例(報文第44図A03)を見出したのでここに掲げておく(桜井ほか1994)。ただし、当該資料の平面形態は本ノ木型に類似しているが、薄造りであるため、別種の可能性が高い。このため、今回は参考資料として提示した。ちなみに関東地方における下呂石製尖頭器は、これまで千葉市六通神社南遺跡の種子柴型尖頭器(西野・島立・蜂屋2003)が唯一であった。南鍛冶山例はこれに次ぐものであり、往時の物資の交流を探る上で、その資料的価値は高い。

(4) 木葉形薄型尖頭器(第10図・第11図)

前回、関東では都合46遺跡(計55点)を数えた(橋本2017a)。今回、追加した資料のうち小山台例については、既に報告済みであり、あくまでも参考例として掲げた。したがって、関東では、小山台例を除けば、その後の追加資料は7遺跡(計8点)ということになる。追加資料は、いずれも遺構外出土であり、小山台遺跡の4例は別格として単独出土を基本とする。武蔵台東遺跡と雷下遺跡の資料はチャートであるが、それ以外は東北頁岩製である。

木葉形薄型尖頭器は薄造りであるにもかかわらず、欠損率が低い。掲載資料の中にも欠損例がみられるが、1b、1c、1d、7a、及び7b欠損部はガジリによるものであり、本来完形品であったことは言うまでも無い。研磨は1、2、5、6、9にみられ、鶴ヶ丘例では、これに線状痕が伴う。

このほかに関東以外では、新潟県魚沼・刈羽地区出土品(松浦・井上1995)がある。地元在住の故星野芳郎氏のコレクションであるが、具体的な遺跡名が不明なのが残念である。木葉形薄型尖頭器は2例あり、第10図8a(長さ3.1cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重さ0.78g)は珪質凝灰岩製で表裏に研磨痕があり線状痕を伴い、8b(長さ4.1cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ0.99g)は東北頁岩製で、表裏とも押圧剥離による精緻な並行剥離が施されている。北陸方面では、いまだ資料数が少なくこれまで関連資料は壬遺跡と小瀬が沢洞穴の二例にすぎなかった。その意味で本例の資料的価値は高い。

第10図：1 小山台遺跡(橋本2016c・2017a)、2 群馬県渋川市三原田諏訪上遺跡(小林・日沖2004)、3 東京都府中市武蔵

台東遺跡(坂東ほか1999)、4 千葉県香取市多田綱原(新田ほか1991)、5 千葉県銚子市新農(宮内1994)、6 埼玉県鶴ヶ島市鶴ヶ丘遺跡(E区)(岩瀬ほか1985)、7 東京都国分寺市武蔵国分寺跡遺跡北方地区(福島ほか2003)、8 新潟県魚沼・刈羽地域(松浦・井上1995)、9 千葉県市川市雷下遺跡

なお、埼玉県深谷市西谷遺跡、東京都杉並区向ノ原例・向ノ原B例については、これまで木葉形薄型尖頭器の類例としてきたが、石材が粘板岩系であることから、後述するように、撚糸文Ⅲ期の局部磨製石鏃に変更し、木葉形薄型尖頭器のリストから除外したことを、ここに明記しておく。

(5) 出現期の石鏃とその形態(第12図・第13図)

① 出現期石鏃の形態と草創期後半の石鏃(第12図)

筆者は、先に関東・中部地方における出現期の石鏃に関する形態的な法則性を検討した(橋本2016b)。

その結果、出現期(草創期後半～早期前半)の石鏃の母型には、第12図のとおり、三角形と五角形の二つの系列があることを確認した。

五角形鏃のうち、Ⅰ～Ⅲ類については、基部周辺の形状(Ⅰ～Ⅲ)と最大幅の位置(a～c)により区分した。基部の形状は、Ⅲ類は尖基であるが、Ⅰ・Ⅱ類には凹基・平基・円基がある。いずれも程度の差こそあれ縁辺は鋸歯状で弧状が基本となっている。Ⅰ～Ⅲ類に対して、基部にむかって両側縁が広がるⅣ類は三角形鏃とのいわば折衷形態である。この類型については、最大幅ではなく両側縁の変曲点の位置(a～c)により細分した。基部は凹基や平基のほかにはやや弧状に膨らむものがある。このほか特異な形態として円脚鏃と鋏形鏃があるが、ともに五角形鏃に包括した。

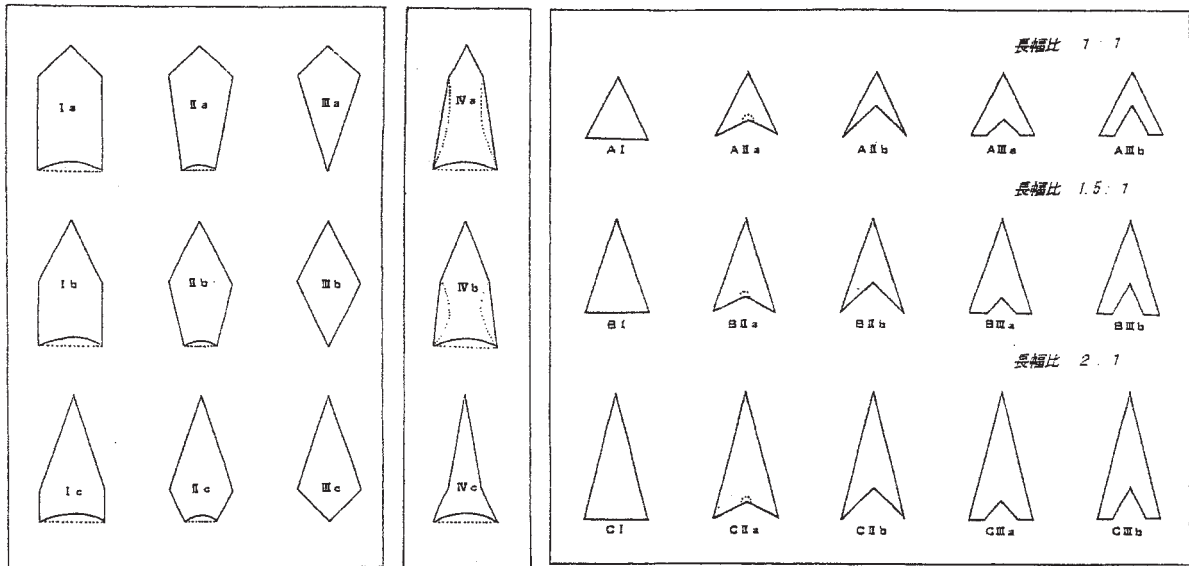
一方、三角形鏃については、大きさの長幅比により大別(A類1:1、B類1.5:1、C類2:1)した上で、基部の抉りの有無とその深淺(Ⅰ～Ⅲ)によりさらに細分した。

このうち、今回提示した小山台例(第2図7)は、縄文草創期後半のⅣ類である。類例(第12図)は、群馬県渋川市三原田諏訪上遺跡(小林・日沖2004)と埼玉県深谷市宮林遺跡(宮井ほか1985)のわずかに2例に過ぎず希少性が極めて高い。

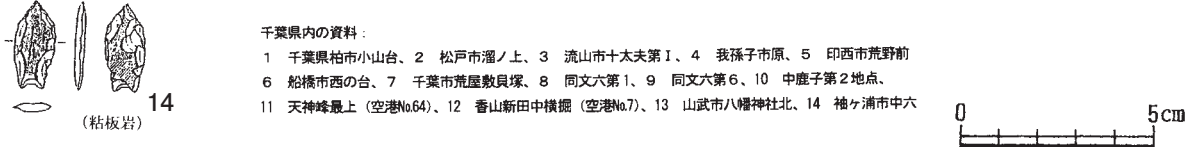
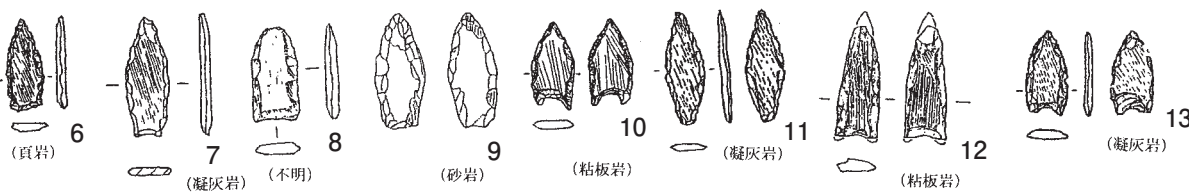
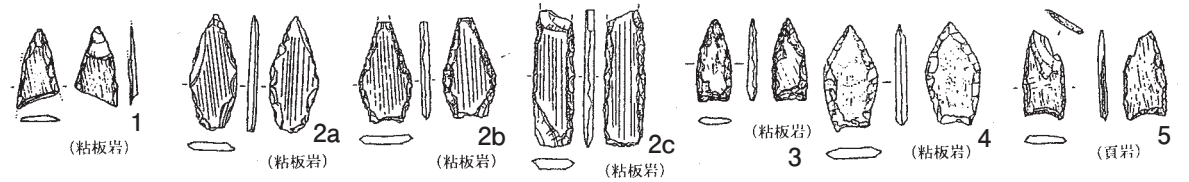
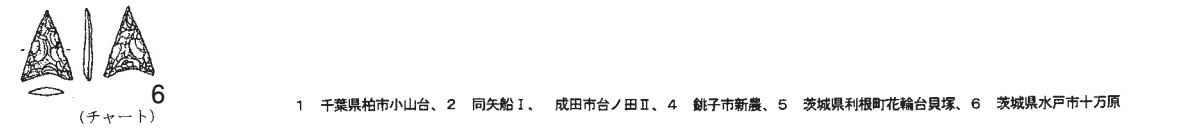
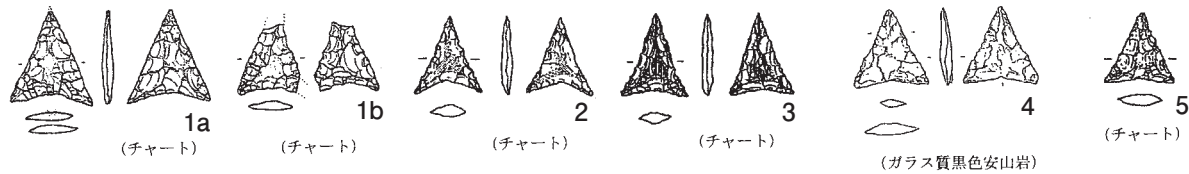
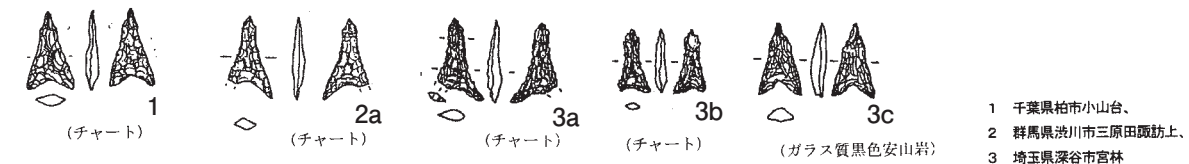
② 早期前半(第13図)

撚糸文期には、縄文草創期に比べ、遺跡数が爆発的に増え、堅穴住居跡等の遺構も枚挙に暇がない。特に関東では多数の事例が蓄積されている。

関東では宮崎朝雄が、時期区分が可能な当該期の堅



第12図 出現期石鏃の形態分類 (左:五角形、中央:折衷形、右:三角形) (橋本2016bを一部改変)



第13図 小山台遺跡の石鏃関連資料
 上段:五角形鏃(縄文時代草創期後半)、中段:三角形(局部磨製)、下段:五角形鏃(局部磨製)

穴住居跡をⅠ期（井草Ⅰ～井草Ⅱ式）、Ⅱ期（夏鳥式～稲荷台式新・稲荷原式古）、Ⅲ期（稲荷原式新・大浦山Ⅰ式・花輪台Ⅰ式～東山式・大浦山Ⅱ式・平坂式古・花輪台Ⅱ式）の3つの時期に区分している（宮崎2004）。仮に宮崎の見解に準拠すればこの中で検討に値する石鏃の出土例は22遺跡65軒（286点）ということになる。

以上の一括遺物の数量を時間軸に置き換えると、撚糸文Ⅰ期が4点、撚糸文Ⅱ期18点であるのに対して、撚糸文Ⅲ期には264点に急増し、Ⅰ期・Ⅱ期とは打って変わって爆発的に石鏃の比率が高まる。特に、武蔵台遺跡では堅穴住居跡25軒から216点もの石鏃が出土しており特筆される。石鏃の形態はⅠ期・Ⅱ期に続き三角形鏃と五角形鏃が共存する。中でも、正三角形に浅い逆V字形の抉りのある石鏃（AⅡa類）がまとまって出土しており、この時期の石鏃を特徴づけている。

同時に、五角形鏃には、新たにⅠ・Ⅱ類を典型とする花輪台型五角形鏃が登場した（橋本2016a）。当該型式は薄手扁平で時として器面が研磨されている。基本石材はチャートであり、遺跡分布は関東中部に偏っている。これに加えて折衷形態のⅣ類が引き続き出現する。Ⅳ類の石鏃は、すでに草創期後半からみとめられるが、Ⅲ期のⅣ類については、中村信博によって提唱した堀込型がこれに該当する（中村2017）。

さらに、局部磨製石鏃も散見されるが、今回、提示した小山台例は、その中でも数少ない撚糸文Ⅲ期のAⅡ類のひとつであり希少価値が高い（第13図）。

千葉県柏市小山台遺跡・同矢船Ⅰ遺跡（白鳥ほか2017）・成田市台ノ田Ⅱ遺跡（蜂屋・矢本1997）、茨城県利根町花輪台貝塚（吉田1951・1979・1990）・水戸市十万原遺跡³⁾

押型文期には静岡県東部に駿豆五角形鏃が登場する。この石鏃は、箱根・愛鷹山麓を中心として出土する大型の五角形鏃である（橋本2014・2016a）。石材には在地の珪質粘板岩が特徴的に用いられており、現在、遺跡数は計53か所、遺物量は182点に達する。概して遺跡単位の遺物量は零細であり、単独例はほぼ半数に達している。当該型式は桜畑上例等縄文草創期後半以来の五角形鏃の系譜（Ⅰ類～Ⅲ類）をひき、押型文期でも後半の細久保式期以降に登場する模様である。時期的に先行する花輪台型五角形鏃とは技術形態学的類似性が指摘され、形態的バリエーション、断面形（薄手扁平）など共通点は多いが、その一方で板状に剥落

する珪質粘板岩の使用による器面調整や平滑な自然面による研磨の省略が特徴的である。このことは、非実用品としての特性を反映しているものと考えられる。

翻って、駿豆五角形鏃とは分布域を接する関東でも対比資料として、同一形態で粘板岩系石材を用いた局部磨製石鏃がみられるこの石鏃の形態的な特徴は、以下のとおりである。

- 平面形は五角形で薄手・扁平。
- 石材は脆弱な粘板岩系を主体とする。
- 脆弱で薄造りにもかかわらず破損率が低い。
- 研磨面は平滑で線状痕が顕著である。このことから、研磨に際しては砥石が用いられたことがわかる。

管見では、分布域は関東西部が主体（31遺跡・35点）で、東部の茨城・栃木県の事例は皆無である。

このような関東における分布の偏りは、「関東東部では中部系列の押型文土器が稀薄」との中島宏の見解に関連づけられる（中島1988）。

今回紹介した小山台の粘板岩製石鏃もそのひとつである。ちなみに、千葉県では、比較的多くの資料が発見されており、都合14遺跡・16点を数える。

柏市小山台遺跡、松戸市溜ノ上遺跡（大森・会田1995）、流山市十太夫第Ⅰ遺跡（森本ほか2015）、我孫子市原遺跡（岡村1988）、印西市荒野前遺跡（新田・山岡2012）、船橋市西の台遺跡（新井ほか1985）、千葉市荒屋敷貝塚（種田・齋木1978）・文六第Ⅰ遺跡（寺門1993）・文六第Ⅵ遺跡（山下ほか1996）、千葉市中鹿子遺跡第2地点（横田1992）、成田市天神峰最上（空港No.64）遺跡（宮ほか2001）、芝山町香山新田中横堀（空港No.7）遺跡（西山ほか1984）、山武市八幡神社北遺跡（黒沢ほか2009）、袖ヶ浦市中六遺跡（西原ほか2013）。

おわりに

以上のように、小山台遺跡出土の国府系ナイフ形石器、上ゲ屋型彫刻刀形石器、本ノ木型尖頭器、及び出現期の石鏃（縄文草創期後半～早期前半）に関する新資料の紹介を行い、併せて、関連資料との比較検討を試みた。

国府系については、東北頁岩製のナイフ形石器の検討、上ゲ屋型については赤玉石製の新資料、本ノ木型については分布域の拡大と下呂石の使用、出現期の石鏃については、草創期前半の五角形鏃、撚糸文期の局部磨製石鏃及び押型文期の粘板岩系局部磨製石鏃の抽

出が主な成果といえる。

その一方で紙数の関係で語り尽くせなかったことも多々ある。特に、石鏃関係については遺漏が多い。この点については、別稿にて補強したい。

謝辞

執筆に当たり以下の方々・機関に御指導・御協力を賜りました。特に、東京国立博物館（品川欣也氏・飯田茂雄氏）や鈴木素行氏、小高春雄氏、伊藤陸憲氏、横田清隆氏、及び野尻湖ナウマンゾウ博物館には、作図や未報告資料の公表に際して特段の御配慮を頂いた。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

東京国立博物館、青山学院大学文学部考古学研究室、千葉県教育委員会、銚子市教育委員会、松戸市教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、三島市教育委員会、野尻湖ナウマンゾウ博物館、渋川市教育委員会、藤沢市教育委員会、川崎市市民ミュージアム、神奈川県立埋蔵文化財センター、伊藤陸憲、横田清隆、鈴木素行、小高春雄、今泉潔、岡本東三、高城大輔、石川太郎、領塚正浩（順不同・敬称略）。

注

- 1) 多摩ニュータウンNo125については追加調査分、上ノ原遺跡（第2次）については報告書に非掲載の遺物であることを付記しておく。
- 2) 東浪見遍照寺裏遺跡は小高春雄氏、粟島台遺跡は横田清隆氏による採集品である。
- 3) 鈴木素行氏による採集品である。

引用参考文献

- 阿部朝衛 1996「新潟県北部地域における旧石器時代の使用石材」『帝京史学』第11号 pp.127-166。
- 阿部朝衛 1997「新潟県北部地域における縄文時代の石材使用とその背景」『帝京史学』第12号 pp.115-153。
- 阿部朝衛 2013「半透明の頁岩」『石器石材のつどい 第2回シンポジウム「富山の石材と玉髓・碧玉」予稿集』pp.21-24 石器石材のつどい。
- 新井和之ほか 1985『西の台(第2次)』船橋市遺跡調査会。
- 新井真博ほか 1982「多摩ニュータウンNo125遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度 第1分冊』財団法人東京都埋蔵文化財センター。
- 池谷信之 2002『西洞遺跡(c・d区)発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 伊丹徹・井澤純・飯塚実保 1996『長津田遺跡群Ⅱ 住撰遺跡』財団法人かながわ考古学財団。
- 伊藤健・竹花宏之 2015『目黒区 氷川遺跡』東京都埋蔵文化財センター。
- 伊藤健ほか 2010『府中市 武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺

- 跡』第239集 東京都埋蔵文化財センター。
- 伊藤玄三ほか 1986『法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ-A地区-』法政大学。
- 岩瀬謙ほか 1985『鶴ヶ丘(E区)』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 岩橋峯幸ほか 1996『多摩ニュータウン遺跡』第27集 東京都埋蔵文化財センター。
- ウィルソンほか 1997『日性寺B遺跡』都立学校遺跡調査団。
- 内川隆志ほか 1996『壬遺跡-第6次調査-』中里村教育委員会。
- 大森隆志・会田信行 1995『千葉県松戸市 溜ノ上遺跡(旧石器・縄文時代編)』松戸市溜ノ上遺跡調査会。
- 岡村眞文 1988『原遺跡・海老宿遺跡』我孫子市教育委員会
- 河内公夫ほか 1994『武蔵台遺跡Ⅱ-資料編2-』都立府中病院内遺跡調査会。
- 川村満博・島田和宏 2003『梶内山遺跡』財団法人茨城県教育財団。
- 北川吉明 1990『横浜市利倉貝塚』菅田利倉貝塚遺跡調査団。
- 旧石器部会 2017「御母衣ダム湖底調査」『どっこいし』第114号 pp.10-13 飛騨考古学会。
- 栗城譲一ほか 1984『多摩ニュータウン遺跡 昭和59年度(第2分冊)』第7集 東京都埋蔵文化財センター。
- 栗城譲一ほか 1989『多摩ニュータウン遺跡 昭和62年度(第3分冊)』第10集 東京都埋蔵文化財センター。
- 栗城譲一ほか 1999『多摩ニュータウン遺跡-No753遺跡-』第75集 東京都埋蔵文化財センター。
- 黒沢崇ほか 2009『両総農業水利事業第3揚水機場建設工事内臓文化財調査報告書2 山武市八幡神社北(1)・(2)・(3)遺跡 第1分冊(本文編)』財団法人千葉県教育振興財団。
- 小坂井孝修ほか 1998『多摩ニュータウンNo344遺跡』第58集 東京都埋蔵文化財センター。
- 小林修・日沖剛史 2004『横野地区遺跡群Ⅴ 三原田諏訪上遺跡Ⅰ』赤城村教育委員会。
- 小林達雄・岡本東三・佐藤雅一・渋谷賢太郎・久保田健太郎 2016『本ノ木遺跡 第一次・第二次発掘調査報告書』津南町教育委員会。
- 斉藤稔・早川由利子 1996『鶴ヶ島市内遺跡発掘調査報告Ⅱ』鶴ヶ島市教育委員会。
- 坂詰秀一ほか 2000『武蔵国府関連遺跡調査報告27 武蔵国分寺跡調査報告4』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会。
- 桜井準也・小林謙一・望月芳 1994『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第1巻 縄文時代草創期』藤沢市教育委員会。
- 佐藤宏之・山口慶一 1999『多摩ニュータウンNo107遺跡 旧石器・縄文時代編』第64集 東京都埋蔵文化財センター。
- 柴田徹 2004「殿山遺跡より出土した石材に関する考察」『殿山遺跡 先石器時代石器群の保管・活用のための整理報

- 告書』 pp.283-299 上尾市教育委員会。
- 白鳥章・山口典子・西川博孝・山岡磨由子・平井真紀子・小林昂博・糸川道行 2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11- 柏市花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・寺下前遺跡・八反目台遺跡- 縄文時代以降編』公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 鈴木一郎ほか 2015『埼玉県和光市 吹上原遺跡(第2次A区~第6次調査)』和光市遺跡調査会。
- 須藤隆司 1999『八風山遺跡群』佐久市教育委員会。
- 園村維敏ほか 2006『東京都新宿区百人町三丁目遺跡VI』国際航業株式会社 文化事業部。
- 竹尾進・武井利通・及川良彦 1999『多摩ニュータウン遺跡 No.125遺跡』東京都埋蔵文化財センター。
- 田中純男ほか 1996『多摩ニュータウン遺跡』第32集 東京都埋蔵文化財センター。
- 種田斉吾・斎木勝 1978『千葉県荒屋敷貝塚-貝塚中央部発掘調査報告-』財団法人千葉県文化財センター。
- 田村隆ほか 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ-元割・聖人塚・中山新田Ⅰ-』財団法人千葉県文化財センター。
- 辻真人・伊藤恒彦・小池聡 2017『山中城D遺跡・山中城E遺跡』三島市教育委員会。
- 鶴間正昭ほか 1983『多摩ニュータウン遺跡 昭和57年度(第2分冊)』第4集 東京都埋蔵文化財センター。
- 鶴間正昭ほか 1990『多摩ニュータウン遺跡 昭和63年度(第2分冊)』第11集 東京都埋蔵文化財センター。
- 鶴間正昭ほか 2015『北区 道合遺跡 赤羽上ノ台遺跡』東京都埋蔵文化財センター。
- 寺門義範 1993「文第6第1遺跡」『土気南遺跡群』Ⅳ 財団法人 千葉市文化財調査協会。
- 中島宏 1988「関東地方における押型文土器の様相」『縄文早期を考える-押型文文化の諸問題-』 pp.115-151 帝塚山考古学研究所。
- 中津由紀子 1977『調布市深大寺堂山遺跡』調布市教育委員会。
- 中村信博 2017「堀込型石鏃の研究」『利根川』39 pp.1-8 利根川同人。
- 中村由克 2004「神子柴系石器群の石材利用」『長野県考古学会誌』107号 pp.19-22 長野県考古学会。
- 中村由克ほか 2008a『上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査報告書』長野県信濃町教育委員会。
- 中村由克 2008b「3 石器石材の原産地の推定」『上ノ原遺跡(第5次・県道地点)発掘調査報告書』 pp.216-231 信濃町教育委員会。
- 西井幸雄 1995『柳戸/新山/向山/青棚/光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 西野雅人・島立桂・蜂屋孝之 2003『千葉東南部ニュータウン26』財団法人千葉県文化財センター。
- 西原崇浩ほか 2013『千葉県袖ヶ浦市 中六遺跡第16次発掘調査報告書』有限会社 勾玉工房Mogi。
- 西山太郎ほか 1984「No.7遺跡」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 財団法人千葉県文化財センター。
- 新田浩三・栗田則久・上守秀明 1991「多田綱原遺跡(No.43)『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ(佐原地区3)』 pp.255-274 財団法人千葉県文化財センター。
- 新田浩三・山岡磨由子 2012『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXV 印西市荒野前遺跡(下層)-』財団法人千葉県教育振興財団。
- 新田浩三 2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書8- 柏市富士見遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡-旧石器時代編-』公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 新田浩三 2017『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書10- 柏市小山台遺跡-旧石器時代編』公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 新田浩三ほか 2018『『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書13- 柏市矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・花前Ⅰ遺跡・花前Ⅲ遺跡・寺下前遺跡・大松遺跡・小山台遺跡・八反目台遺跡・館林遺跡- 旧石器時代編』公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 橋口尚武ほか 2008『東京都あきる野市 原小宮地区遺跡群』原小宮地区遺跡調査会。
- 橋本勝雄 2010「上ゲ屋型彫刻刀の技術的特質とその評価」『房総の考古学 史館終刊記念』 pp.1-21 史館同人 六一書房。
- 橋本勝雄 2012a「柏市大六天遺跡出土の石槍の再評価-千葉県における旧石器時代終末期の石槍について-」『かしの歴史- 柏市史研究創刊号-』 pp.217-230 柏市史編さん委員会。
- 橋本勝雄 2012b「本ノ木型尖頭器総論- 槍と植刃器のかかわり-」『研究紀要』第9号 pp.1-30 財団法人印旛郡市文化財センター。
- 橋本勝雄 2014a「本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器、そして移行期の石器編年」『シンポジウム 時代の変革と石器の変遷- 旧石器から縄文石器へ- 予稿集』 pp.56-67 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会。
- 橋本勝雄 2014b「[駿豆五角形鏃]の特質とその背景」『静岡県考古学研究』第45号 pp.1-14 静岡県考古学会。
- 橋本勝雄 2016a「[駿豆五角形鏃]と出現期の石鏃とのかかわり- 縄文早期押型文期における石器の地域相-」『静岡県考古学研究』第47号 pp.1-14 静岡県考古学会。
- 橋本勝雄 2016b「関東・中部における石鏃の出現とその系譜- 縄文草創期から縄文早期前半まで-」『茨城県考古学協会誌』第28号 pp.1-40 茨城県考古学協会。

- 橋本勝雄 2016c 「〈研究ノート〉 柏北部東地区出土の旧石器・縄文時代の石器3例－木葉形薄型尖頭器・大型尖頭器・国府型ナイフ形石器の紹介と関連資料の検討－」『研究連絡誌』第77号 pp.1-9 公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 橋本勝雄 2016d 「上ゲ屋型彫刻刀形石器の特質とその背景－上ゲ屋型の再検討－」『旧石器考古学』81 pp.29-46 旧石器文化談話会。
- 橋本勝雄 2017a 「柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器－本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器・花輪台型五角形鏃の紹介と関連資料の検討－」『研究連絡誌』第78号 pp.1-12 公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 橋本勝雄 2017b 「東日本における国府系石器群の地域的様相－関東地方を中心として－」『考古学ジャーナル』698 pp.10-14 ニューサイエンス社。
- 橋本久雄ほか 1989 『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅲ－一般国道51号鹿島バイパス－』 鹿島町遺跡保護調査会。
- 蜂屋孝之・矢本節朗 1997 『成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書1 成田市台ノ田Ⅱ遺跡』 財団法人千葉県教育振興財団。
- 蜂屋孝之 2017 「公益財団法人 千葉県教育振興財団 平成二十八年度の調査成果から」『千葉県文化保護協会報』第106号 pp.4-5 千葉県文化財保護協会。
- 服部隆博 2000 「多摩丘陵南東部における後期旧石器時代遺跡の一樣相－川崎市宮前区鷺ヶ峰遺跡石器の再検討－」『川崎市市民ミュージアム紀要』第12集 pp.1-56 川崎市市民ミュージアム。
- 原川雄二ほか 1987 『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度(第2分冊)』 第8集 東京都埋蔵文化財センター。
- 坂東雅樹ほか 1999 『武蔵台東遺跡』 都営川越道住宅遺跡調査会。
- 福島宗人ほか 2003 『武蔵国分寺跡遺跡北方地区』 東京都埋蔵文化財センター。
- 松浦有一郎・井上洋一 1995 『東京国立博物館寄贈品図録 星野芳郎コレクション [日本考古]』 東京国立博物館。
- 宮重行ほか 2001 『新東京国際空港発掘調査報告書XV－天神峰最上(空港No64遺跡)－』 財団法人千葉県文化財センター。
- 宮井英一ほか 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 宮内勝巳 1994 『新農遺跡』 財団法人東総文化財センター。
- 宮内慶介ほか 2016 『加能里遺跡 第42・43次調査』 飯能市遺跡調査会。
- 宮崎朝雄 2004 「縄文早期撚糸文文化の堅穴住居について－関東地方における初期定住化－」『縄文時代』第15号 pp.1-32 縄文時代文化研究会。
- 森本和男・新田浩三・山岡磨由子・平井真紀子 2015 『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・西初石六丁目遺跡1(上層)・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』 公益財団法人千葉県教育振興財団。
- 山下亮介ほか 1996 「文六第6遺跡」『土気南遺跡群』Ⅷ pp.169-282 財団法人千葉市文化財調査協会。
- 吉田格 1951 「局部磨製石鏃考」『考古学ノート』創刊号 pp.2-4 武蔵野文化協会考古学部会。
- 吉田格 1979 「94 花輪台貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先石器・縄文時代』 pp.213-218 茨城県史編さん第一部会 原始古代史専門委員会。
- 吉田格 1990 「26. 花輪台貝塚」『吉田格コレクション 考古資料図録』 pp.56-66 立正大学文学部考古学研究室編 立正大学学園。
- 吉田章一郎ほか 1983 『千葉県山武町森台古墳群の調査』 青山学院大学 森台遺跡発掘調査団。
- 横田正美ほか 1992 『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』 財団法人千葉市文化財調査協会。